

《六月霜》における言語的特徴について

大島 吉郎

On the Linguistic Features of *Liuyue Shuang*

OSHIMA Yoshiro

摘要

《六月霜》是一部晚清纪实性小说，二编十二回，刊于1911年。它主要描写一位提倡女权的革命家秋瑾（1875-1907）一生的事迹。本文根据大島吉郎（2020）、（2023），整理并分析该书语词与语法成份所表现的江淮官话，以太田辰夫清代北京话七大特点说相比较《邻女语》、《官场维新记》两书的语言特点。

キーワード：《六月霜》 言語的特徴 清末江淮官話 太田辰夫北京語七大特点

0 はじめに

本書《六月霜》は、香坂順一 1962b が上げる下江官話資料5種の1冊である¹⁾。全2編12回、62,000字。

同書は静観子著、1911年改良小説社より刊行された清末小説である。阿英《晚清小説史》第8章「種族革命運動」（pp.100）によれば、秋瑾²⁾の幼少期から革命運動（武装蜂起）に身を投じ、徐錫麟蜂起事件の共謀者として、紹興で処刑され亡くなるまでを描いており、書名である《六月霜》は「鄒衍獄に下り、六月霜を飛ばし、齊婦冤を

¹⁾ すなわち《六月霜》、《負曝閑談》、《鄰女語》、《苦社会》、《官场維新記》の5種を言う。

²⁾ 飯塚朗・中野美代子（1979:335）注（25）参照。「秋瑾（1875?～1907）、字は璿卿、のちに競雄。鑑湖女俠また漢俠女兒と号す。浙江省紹興の人。はじめ王廷鈞と結婚し一男一女を生んだが、義和團事件により革命を志し、夫を捨てて光緒30年（1904）日本に留学、革命運動に投じた。同32年に帰国、『中国女報』を創刊、また郷里の明道女学と大通学校で教員となった。やがて徐錫麟とともに光復軍を組織したが恩銘暗殺事件に連座して捕えられ、同33年6月6日刑死した。」

含んで、三年雨降らず」³⁾の故事に依るといふ。作者として名前の上がる静観子は出身地、生卒年、経歴共に不詳であり、作者として人物が判明されるには至っていない。

小説《六月霜》从秋瑾很小的时候、一直写到她在绍兴就义，以及她和徐锡麟关系的始末。这部小说，写在她死后不久，所引用的诗词文字，全部是她的原作，书名所以题作《六月霜》。是由古书上的“邹衍下狱，六月飞霜，齐妇含冤，三年不雨”的前半而来。意思是说秋瑾之死，实在是冤枉的。再则，就是秋瑾就义，也在六月。

文献（言語資料）の言語的特徴を窺う上で、作者の言語的背景は重要な情報をもたらしてくれるはずであるが、本書においては言語的特徴から作者が置かれていた言語環境を推定して行くことになる。本書の成立に当たっては、嬴季季女の伝奇を下敷きにしているという⁴⁾。この伝奇との比較・対照を行うことで、本書の特徴がより一層明らかになるものと考えられるが、資料的評価の問題と併せ、次の段階における課題としたい。

本書1911年初版本は容易に見ることを得ず、現在は1958年上海文化出版社本、また翌年1959年刊中華書局本、1997年刊春風文藝出版社本が一般に流布している⁵⁾。上海文化出版社本と中華書局本の“出版者の話”は簡体字・繁体字の使用、書式（字数、行数）に多少の違いは見えるものの、字句の異同は見られない。本文、脚注、ページ数について両者はまったく同じであり、書誌情報における出版社名及び関連事項の記載が異なるに過ぎない。目次、本文には同じ版下が使われたものと考えられる。

本稿では1958年上海文化出版社本を用い、例文はすべて簡体字に統一して掲出することとしたい。本来であれば1911年初版本を底本として校訂を行い、正確なデータに基づいて記述を行うべきであるが、底本の入手が不可能であるため、得られたデータも暫定的な根拠として扱う必要がある。

江淮（下江）官話⁶⁾は、北方官話と呉語地区を中心とする南方官話の緩衝地帯に話される地域共通語としての性格を有する。故に北方、南方双方の言語的影響を受けつつも、独自の言語観が窺える。本稿では大島（2020）、大島（2023）に引き続き、太

³⁾ 飯塚朗・中野美代子（1979:336）注（31）参照。「邹衍は戦国時代齊の人。恵王のとき冤罪を蒙って獄に下ったところ、夏の六月というのに霜が降ったという故事がある。（中略）なお、後半「齐婦」以下は、東海の孝婦といわれた女が、早くに夫を亡くしたあともよく夫の母に仕えていたのに、その姑が自殺すると義妹に告訴されて死刑となり、以後三年、その郡中に雨が降らなかったという故事。」

⁴⁾ 阿英（1980:100）参照。“《六月霜》在当时共有两种，一即小说，一为嬴季季女之传奇。小说即据传奇作成。”

⁵⁾ 《六月霜 风月梦 拒约奇谈 新西游记》、董文成・李勤学主编《中国近代珍稀本小说》第18辑、1997年春风文艺出版社、は未見である。

⁶⁾ 太田辰夫（1995:244）は「なお江淮官話は南京官話と呼ぶ。」と述べる。

田辰夫北京語七大特点を軸に据え、本書の言語的特徴についての分析、整理を行うものである。

1 清代北京官話の特徴との関係

1.1 第一人称“咱们”

太田辰夫（2013:105）は“咱们”について次のように述べ、「包括形ができたのは宋代である」と指摘する。

現代語の代名詞一人稱複数には2種類あり、《我們》は除外形、《咱們》（また《咱们》《咱們》とも書く）は包括形である。《我們》は一人稱プラス三人稱、《咱們》は一人稱プラス二人稱である。

太田辰夫（1969:186）が指摘するように北京官話の指標の一つであると考えられ、南方官話では使用されない。清末の江淮官話での使用も極めて限定的であると言ってよい。本書に“咱”系の語彙は現れない。宋代から使用例が見られるにも関わらず、北京語としての特徴に限定される理由については、語義、満州語からの影響に関する問題も含め、改めて考察を重ねる必要があるものとする⁷⁾。

1.1.1 “咱们”

本書に用例は見られない。

1.1.2 “咱／咱家”

本書に用例は見られない。

1.1.3 “俺”

本書に用例は見られない。

1.1.4 “自己／自家”

“自己”は72例見られるのに対し、“自家”は地の文で1例のみ使用される。例えば、(01) …，把衣服质典些在这里，横竖自家省些就是了，何不分一半去送他监里使用。（第9回：45頁）

許宝華・宮田一郎（2020:1803）は“自家”：〈代〉“自己”の意味での使用例として、冀魯官話、中原官話、晋語、蘭銀官話、江淮官話、西南官話、吳語、湘語、贛語、客語、粵語、閩語からの例を引く。

1.1.5 付記“您／你老人家”

本書《六月霜》に“您”は見られないが、“你老人家”は1例のみ尊称として使用される。例えば、

⁷⁾ “咱”系語彙については、許宝華・宮田一郎（2020:3579-3580）を参照されたい。

(02) 富太守连忙答道：“是的，是的。就烦你老人家起一个稿子出来，好叫他们誊去。”那老夫子听了，便立刻起了一张稿子，…。(12:70)

1.2 介詞“给”

1.2.1 受益の対象を導く用法

(03) 牛老爷见他把笔掷了，便命：“把纸头拿上来给他看。”衙役将纸呈上。牛老爷接在手中一看，只见一共写了七个字。你道七个是什么字，原来是一句七言的律句，写的是“秋雨秋风愁煞人。”(5:32)

秋瑾が文字を書き終え筆を置いたのを見て、牛氏は役人に紙を渡すよう秋瑾に命じる場面での発話である。役人から紙を受け取った牛氏にはそこに書かれていた“秋雨秋风愁煞人。”という七言律詩を解釈できなかつたと述べる。“给他看”は役人口調(官話)での強い命令文である事を強く印象付けるために使われたものと考えられる。本書での用例はこの1例のみである。

1.2.2 受け渡しの対象を導く用法

(03) 看官切莫性急，待作者把它慢慢的补叙出来，给众位知道。(7:37)

物語の書き手が読者に向かって、「さてみなさま、そう先を焦ってはいけません、私がここで事の仔細をゆっくりお話し申し上げ、お聞かせ致しましょう」と語りかける文である。小説の地の文でありながら、講師師の語りの形式を借りた、章回小説の文中に使われるような特殊な口調を伴って“给”が使われている。「(人)から(人)に(授受・伝達)する」という意味での用例はこの1例のみである。

1.2.3 “替”

全48例。すべて受益の対象を導く用例であり、受け渡しの対象を導く例は見られない。例えば、

(04) …，今日忽地听见她受屈死了，也不免要替她滴下几点酸泪呢。(1:4)

(05) “…。你们不要忘记了，替我誊一誊出来。…”(2:8)

(06) “…。小的们闻得大老爷也在这里，为此特来叩求大老爷替我们伸冤的！”(5:22)

“替”に導かれる動詞句は、行為の及ぶ対象にとって望ましい、好ましい事柄に留まらず、本人が実行できないため、本人に代わり実現するという例も多数用いられる。出現順で例を上げると、例えば、“出一点力／不平／代请一声安／现世／揩眼泪／伸冤／伸冤理枉／弥补弥补／一一的写来／抱怨／剖白／雪雪这个冤／分分忧、雪雪耻／抱冤起来／铸铜像作个纪念／争回了这个自由／去告诉了会长／去寻学堂／介绍到本乡汤岛地方一个女子高等学校里头／理好了／办些好事／打算些生计／忧虑／洗尘／落下泪来／伸伸这口冤气／呼冤起来／逐段逐段的注了脚／想了一个善全的法儿／雪这冤气／伸雪冤仇／收拾／办一办／安置／办这个善后的事宜／卜起坟地来／择婿／叹息了一回／出力出钱／筑了一个极荣耀极壮丽的坟墓／出头／办了这件事”。

これらの例から、「(本人)に替わって(人)が～する」から「(本人)に替わって(人)

が～してあげる」、さらに「(本人)に(人)が～してあげる」、「(人)に(人)が～してあげる」へと意味、用法の拡張が行われ、機能語化した過程を窺うことができる。

1.2.4 “V 给～”

1.2.4.1 兼語式を形成する例

全6例。“抄给～”：1例、“交给～”：2例、“教给～”：1例、“念给～”：1例、“说给～”：1例。例えば、

(07) 诸位不嫌讨厌，待我慢慢的想它出来抄给诸位看看。(11:65)

(08) 便连夜上省，到了章中丞那里，把老夫子教给他的说话一一和章中丞说了，…。(12:72)

(09) 在下说到这里，有一位看官问道：“…。你说书的也该一一的说给我们听听，免得我们巴巴儿的，心中好不难过！”(2:11)

1.2.4.2 複合動詞としての例

全3例。“送给～”：3例。例えば、

(10) 禅隐听了，说道：“…。这块地既经二位施主看中，贫尼就把这块地送给了秋施主，也算我表一表敬慕秋施主的意思。”

1.2.5 “V 把～”

“把”が“给”の意味で用いられる例は本書に見られない。

1.3 助詞“来着”

過去の追憶を表す“来着”は本書に用例は見られない。“来着”が山東方言、江淮官話において概ね“来”で対応することについては大島（1996:23）、尾崎實（2007:366）を参照されたい。太田辰夫（1967）は「南京官話では“来”といい、さらに助詞“的”または“呢”をつけることもある（KLM）。」と述べ、“来”検討の必要性を示唆する。

1.4 語気助詞“呢”

語気助詞“呢”は全148例。用例数を《鄰女語》、《官場維新記》と比較すると顕著な差があり、本書が《老残游記》と似た様相を呈することが分かる。

	《老残》	《鄰女語》	《維新記》	《六月霜》
呢	371	31	14	148
哩	2	5	0	16

1.4.1 肯定文

1.4.1.1 文末

全73例。肯定文文末での使用例が半数を占める。例えば、

(11) 且说那老妈妈笑了一笑，说道：“为什么这时候才送来？我们奶奶才问着呢。”(1:1)

(12) 忽见她要去了，便立起身来，一把拖住，死命要叫她坐下，说道：“我还有话和妹妹说呢。”(2:8)

(13) 那张四战战兢兢的说道：“…，把我们这个大通学堂团团的围得铁桶相似，又像要进来搜查的样子呢！”(4:20)

1.4.1.2 文中

全3例。語気の停顿する箇所に用いられ、“至于”あるいは“要说”などの意味を含み、列挙、対比などのニュアンスを持つ⁸⁾。例えば、

(14) 越女士又道：“在国外呢，那倒本来不怕什么，所怕的是我们中国内地的关卡。…”(11:64)

(15) 一来呢，可使家业兴隆；二来呢，可使男子敬重。(11:67)

1.4.2 疑問文

1.4.2.1 疑問詞疑問文

全67例。全用例のほぼ半数に上る。用例には反語文も含めている。例えば、

(16) 看官试猜一猜，他看见了什么，才致如此的惊怪呢？(1:2)

(17) 富太守也便立起身来，说道：“妹妹，为什么不到家慈那边去坐一回，就在这里吃了夜饭去呢？”(3:13)

(18) 禅隐道：“…。这是我自己的，情愿送与秋施主的，又不是二位施主来骗我的。有什么敢当不敢当呢？”(12:77)

1.4.2.2 選択疑問文

全3例。例えば、

(19) 那老夫子也笑道：“…。今天只要决定一决定；还是用这个平日的宗旨呢，或是不用这个平日的宗旨。宗旨定了，然后再去讲办法。”(4:18)

(20) 两旁衙役见富太守这个光景，不知是中风呢还是中暑，也都没有主意。(5:29)

(21) 见秋女士拉着他姊弟两个，在那里唠唠叨叨的，不知说些什么，便进房坐下，问道：“夫人，你到底去呢不去？”(8:43)

1.4.2.3 反復疑問文

全1例。例えば、

(22) 这都亏了从前书报的功效哩！今天到了这个地步，你说可羞不可羞呢？(11:66)

1.4.2.4 省略疑問文

全1例。反語を表す“何况”とともに用いられているが、名詞成分“一个人”を承けているので、省略疑問の形式として整理することにする。例えば、

(23) 女士道：“为国民流血的这话，大哥，你也责备得他们太过了。动物界的微生物，尚且惜着性命，何况一个人呢？…”(10:57)

1.4.3 “哩”

全16例。“哩”は“呢”と併用され、会話文、地の文ともに用いられる。“呢”と異なり、

⁸⁾《现代汉语八百词（增订本）》(1999:413)。

“哩”は疑問文に使用されない⁹⁾。

1.4.3.1 文末

全12例。例えば、

(24) 你道这八个字没有什么道理的么？却是有大大的一个道理哩！（6:33）

(25) 越女士又道：“…。倘被他们看见了，恐怕就要把贤妹当作革命党了哩！”（11:61）

(26) 老夫子道：“东翁也不必去讲究什么智囊同酒囊哩。…”（12:70）

1.4.3.2 文中

全4例。例えば、

(27) 却说秋女士的丈夫听了秋女士一番规谏，便冷笑一声的答道：“…。我中国几千年来，什么汉哩，唐哩，宋哩，元明哩，哪一朝不是二百年，便要衰败一回，然后再盛？…”（8:39）

1.5 副詞“別”

“別”は禁止を表す副詞である。許宝華・宮田一郎（2020:2323）には“別”について禁止義が上げられていない。

1.5.1 “別”

本書に用例は見られない。

1.5.2 “莫”

“莫”が単独で禁止を表す例は1例のみであり、生産性は高くない。例えば、

(28) 那里兵丁们放了一阵枪，诸标统见只有外头放进去的，没有里头放出来的，就传令兵丁们：“莫放枪了，快快进去搜捕罢！”（4:21）

文言の口調で使用される例を除くと、“莫怪”、“莫说”など特定の動詞とともに用いられる例と、“莫不是…么”のように反語を表す特定の形式としての使用に制限されている。

1.5.3 “不要”

全38例。本書における禁止義は“不要”が担っていることを指摘することができる。例えば、

(29) 正要想句话儿来回答她，不料她又接着说道：“…。姊姊千万不要忘记呀！我要去了。”（2:8）

(30) 这么算来，还是不要惹人笑话了吧。（3:15）

(31) 众人都道：“你不动了好一会了，这时候方才好些，也该歇息歇息，养养神，不要弄坏了身体。”（5:29）

1.5.4 “不消”

全4例。会話文での例も1例見えるが、生産性は低い。例えば、

(32) 我们女界中的同胞，更不消说了，只知道争宠献媚，哪里有肯把国家两字放在

⁹⁾ “哩”と“呢”の意味的対応関係は《现代汉语八百词（增订本）》（1999:413）を参照されたい。

心上的呢？（10:52）

(33) 那个越女士正在里头和几个女学生并自己的一个女儿讲论书史，忽见一个老婆子进来报道：“…。我不认得她，叫他到外头等一等，她说和奶奶是素来认得的，不消通报，她就在后头跟进来了。”（10:59）

1.5.5 “没得”

千野万里子（2017）は否定副詞“没得”を南京方言として考察する。本書に“没得”は用いられておらず、《鄰女語》、《老残遊記》からも用例は検出されない。《官場維新記》には1例“没有”義での用例が見るのみであり、禁止義での用法ではない¹⁰⁾。例えば、

(34) 显得利道：“有有，只要利息略为加重些，那财东也愿意出借；不过经手人的好处没得几多了。”（《官場維新記》14:94）

1.6 程度副詞“很”

全24例。形容詞に留まらず、動詞の程度を修飾する用法、否定詞“不”を伴うなど、本書において“很”の応用範囲は広く、もはや北京語に特有の語であるとは言えない段階にある。

1.6.1 “很” + 形容詞

単音節形容詞：“好／多／难”など10例、二音節形容詞：“明白／危險／重大”など3例。例えば、

(35) 錫麟道：“很好，很好！我最爱你两句就是那‘铜驼已陷悲回首，汗马终惭未有功’。…”（10:56）

(36) 錫麟道：“你这个宗旨若要达到目的，恐也是件很难的事呢。”（10:57）

(37) 又听越女士说道：“这件事体是很危险的，又很重大的。…”（1:5）

1.6.1.1 “很” + 動詞

例(39)は“把”構文の述語に“很”が使われている例である。

(38) 惟有这位受冤的女士，也是很有才情，很具热心的，…。(1:3)

(39) …，因此徐錫麟也把女士很敬重，二人就此结为知己。(10:54)

(40) 那个安徽抚台恩中丞很赏识他，派他做了巡警学堂的总办，又兼办了几个差使。(10:58)

1.6.1.2 “很 + 有（些儿）～”

(41) 宝儿道：“母亲，你不知道革命的道理是很有味的。”(3:15)

(42) 越女士急又说道：“…；外国很有许多贵族女子都舍身去当这职业，以尽救济同胞的义务。…”(9:48)

¹⁰⁾ 太田辰夫（1964）は「5.7 北方語では“没的”（“没得”とも書く）を動詞のまえにおき“…するものが無い”という意味をあらわす。つまり文語の“無所”に相當する。このような表現は南京官話には見られない。次の譯では“没有吃的”などとしたが、むろんこのいいかたも北方語で普通にある（K）。要吃没的吃，要穿没的穿→要吃没有吃的，要穿没有穿的」と指摘する。

(43) 此时越女士心中很有些儿惊疑，正要想迎她进来，…。(2:7)

1.6.1.3 “很不+～／不很+～”

(44) 老夫子看毕，回头向富太守说道：“…。亏这冯藩台手段还好，就这么迅速迅速的平静了，倒也很不容易。(4:17)

(45) 那白须老者听了，连忙说道：“…。我看秋女士的为人，宗旨虽然不很纯正，然这个守身的道理，…”。(7:36)

(46) 且说这个京官到底姓甚名谁，在下也不很明白，…。(7:37)

1.6.2 “～+得很”

“很”は程度補語として“～+得很”の形でも用いられている。全9例。例えば、

(47) 现在这位越女士是一个饱学的女子，又兼开通得很，…。(1:3)

(48) 他一到了任，就和这地方上新学界的绅士要好得很。(3:11)

(49) 夫人道：“天气热得很，搬出来早早吃了，好去乘凉。”(3:15)

本書に“～得慌”は見られない。

1.6.3 “～+得了不得”

全7例。“了不得”が江淮官話であることは大島（1996:25）参照。

(50) 这位越女士，抱负有素，得了这个消息，自然快活得了不得，便投身出来，…。(1:3)

(51) …，不料她写了一个字，又把笔搁了起来，恨得心里难过了不得。(5:32)

(52) …，一呼百诺，奴仆成群，一出门真个是前呼后拥，荣耀得了不得，在家时颐指气使，阔绰得了不得。(11:66)

	《老残》	《鄰女語》	《維新記》	《六月霜》
很	18	2	0	9
了不得	10	5	0	7

1.6.4 “～+得紧”

全2例。例えば、

(53) 越女士一头听，一头在那里想道：“…。真正是可怕得紧！”(9:49)

(54) 秋女士见逼得紧，没办法，提笔写了一个“秋”字，又不写了。(5:31)

例(54)は供述書を書くよう強く迫られている場面での描写である。“見”は受身を表す。

1.7 形容詞+“多了”

本書に用例は見られない。“多了”は程度補語として「ずっと、はるかに」の意味を表す。大島（2023:8）では<（“比”+）“还要”+形容詞>を江淮官話の特徴の一つとして用例を検討したが、本書にこの例は見られない。

1.8 小結

大島（2023）に基づき、本稿で検討した内容をまとめたのが次の表である。

太田1969	《老残》	《鄰女語》	《維新記》	《六月霜》
人称代詞“咱们”	咱们 ₁ ×	1) 咱们 ₁ ○ 咱们 ₂ ○ 2) 咱家 ○	1) 咱们 ₁ × 咱们 ₂ × 2) 咱家 ×	1) 咱们 ₁ × 咱们 ₂ × 2) 咱家 ×
介詞“给”	1) 受益者 ○ 2) 被害者 × 3) V给 ○ 4) 被動 ○ 5) “把” = “给” ×	1) 受益者 △ 2) 被害者 × 3) V给 ○ 4) 被動 △ 5) “把” = “给” ○	1) 受益者 △ 2) 被害者 × 3) V给 ○ 4) 被動 × 5) “把” = “给” △	1) 受益者 △ 2) 被害者 × 3) V给 ○ 4) 被動 × 5) “把” = “给” ×
助詞“来着”	×	×	×	×
語気助詞“呢”	1) “呢” ○ 2) “哩” ○	1) “呢” 呢 ₁ ○ 呢 ₂ ○ 呢 ₃ △ 2) “哩” △	1) “呢” 呢 ₁ ○ 呢 ₂ ○ 呢 ₃ × 2) “哩” ×	1) “呢” 呢 ₁ ○ 呢 ₂ ○ 呢 ₃ △ 2) “哩” ○
副詞“别”	○	×	△	×
程度副詞“很”	1) 很 ○ 2) 怪 ○	1) 很 △ 2) 怪 ×	1) 很 ○ 2) 怪 ×	1) 很 ○ 2) 怪 ×
形容詞+“多了”	1) …多了 × 2) 比…还要… ○	1) …多了 △ 2) 比…还要… △	1) …多了 × 2) 比…还要… △	1) …多了 × 2) 比…还要… ×

語気助詞“呢”、程度副詞“很”の2項目が太田辰夫北京語七大特点と一致するが、他の5項目については合致しないことが分かる。

2 接尾辞“～子”と“～儿”

本書における“儿化”語彙のバリエーションは《鄰女語》、《維新記》に比べ格段に豊富である。語数について資料四点からまとめてみることにしたい。

	《老残》 ¹¹⁾	《鄰女語》	《維新記》	《六月霜》
～子	316	65	57	34
～儿	40	33	10	35

“儿化”語彙の割合が高い傾向は、北方語への傾斜の一端を窺わせると言ってよいであろう。

2.1 “～子”

語数：34、用例数：121。

¹¹⁾ データは陳舒媛（2021:19-21）を参照。

2.1.1 人に関わる語

兒子 (9) / 孩子 (3) / 老妈子 (4) / 老子 (6) / 妹子 (11)¹²⁾ / 婆子 (14) / 妻子 (3) / 嫂子 (7)

2.1.2 名詞

大島 (1996)、尾崎實 (2007) との対照を行ったが、本書に江淮官話に特有の語は見えない。例えば、

案子 (1)¹³⁾ / 辮子 (1) / 胆子 (4) / 肚子 (2) / 緞子 (1) / 法子 (3) / 房子 (1) / 稿子 (3) / 褲子 (2) / 乱子 (2)¹⁴⁾ / 日子 (8) / 身子 (2) / 绳子 (3) / 蹄子 (1) / 屋子 (4)¹⁵⁾ / 箱子 (1) / 鞋子 (1) / 性子 (3) / 袖子 (2) / 様子 (7) / 椅子 (2) / 银子 (5) / 院子 (1)

例えば、

(55) 所以我前头想在上海集个万金股本 (二十元做一股), 租座房子, 置个机器, 印报编书, …。(11:68)

(56) 一面说, 一面传令命兵丁们把这屋子细细的搜它一搜, 好歹找一个人出来才罢。(5:24)

2.1.3 量詞

点子 (2) / 一腔子 (1) / 一阵子 (1)

例えば、

(57) 这是不得了的, 非但把她好好的一肚文才, 蓬蓬勃勃的一腔子热血, 都埋没在不正之途, 枉了她这一世; …。(9:47)

2.2 “～儿”

語数: 35、用例数: 90

2.2.1 人に関わる語

姐儿 (1) / 老头儿 (2)

2.2.2 名詞

绸儿 (1) / 床儿 (1) / 当儿 (4) / 緞儿 (1) / 朵儿 (2) / 法儿 (10) / 粉儿 (1) / 官儿 (10) / 花儿 (2) / 话儿 (14) / 肩儿 (1) / 尖儿 (1) / 泪珠儿 (2) / 名儿 (1) / 生活儿 (1) / 性儿 (1) / 性命儿 (2) / 眼圈儿 (1) / 腰儿 (3) / 针儿 (1) / 脂儿 (1) / 纸儿 (1) / 纸包儿 (2) / 足儿 (1)

2.2.3 動詞句

¹²⁾ 本書には“妹子”とともに“妹妹”も使用される。“妹子”:11例に対して“妹妹”:31例であり、方言としての“妹子”より北方官話の“妹妹”が多用される。

¹³⁾ 大島 (1996:1) では“案子-案”として、“案子”を北京語とする。

¹⁴⁾ 大島 (1996:26) では“祸事:纠纷”義の“乱子-漏子”について、 “乱子”を北京語とする。

¹⁵⁾ 大島 (1996:41) では“屋子-房子”の関係が示されるが、例(55)から“房子”は「部屋」の意味ではないことが分かる。

打伙儿 (2) / 跺脚儿 (1) / 排队儿 (1)

2.2.4 副詞

巴巴儿 (1) / 渐渐儿 (2)

2.2.5 量詞

点儿 (3) / 些儿 (3) / 一回儿 (3) / 一会儿 (6)

3 方言的色彩を帯びた語及び表現について

3.1 助動詞“要想”、“想要”

本書における“要想”と“想要”の用例数は6例：7例と拮抗する。同時期の資料と比較してみると、その差異は顕著である。

	要想	想要
1903《老残》	1	2
1903《鄰女語》	13	1
1906《維新記》	35	2
1911《六月霜》	6	7

例えば、

(58) 此时越女士心中很有些儿惊疑，正要想迎她进来，忽见那秋女士已走至跟前，…。(2:7)

(59) 忽听见越女士说道：“这是我方才随笔写的，想要把这篇小传明日先去登报，然后再慢慢的从长计议。…”(2:8)

3.2 “VV + 結果補語”

本書に2例見える。いずれも“明白”が結果補語となっている。

(60) 那个富太守也是个只要自己升官发财，保太平，就不问问明白，竟以人的性命当作杀鸡杀鸭一样，…。(11:69)

(61) …，他就着急起来了，连个情节都没有弄弄明白，就是这样牛头不对马嘴的出了一张谎说告示，…。(12:71)

本書にはさらに<V-V + 複合方向補語>の形式を持つ表現も存在する。例えば、

(62) 忽听见越女士说道：“这是我方才随笔写的，想要把这篇小传明日先去登报，然后再慢慢的从长计议。你们不要忘记了，替我誊一誊出来。我明天饭后就要送去的。”(2:8)

“替我誊一誊出来”は、「私に替わって（私のために）書き写す」の意。動詞“誊”の重量型は相手への配慮を示し、依頼表現として強くなり過ぎないように口調を緩める働きをする。“出来”は書き写した結果、文章が紙にしっかりと表れ出ることを意味する。

刘 顺・潘文（2008:51）は“浙江吴语中的 VVR 动补结构形式中 R 除了形容词，还

可以是趋向动词，例如‘拔拔出、装装上、送送去、塞塞进去、压压落去’等（木玉1996）。”と指摘する。この例でこのような文型が用いられているのは、作品の主人公である秋瑾が紹興の出身であることから、言語的特徴により人物形象を明確に描こうとした意図があるように考えられる。

3.3 “今天／今日／今儿”

本書に“今儿”など時間表現に“～儿”系の語は見えないものの、“～天”系の語は多用される。大島（1996）、尾崎實（2007）に依れば、“今儿－今日／今儿－今天／今儿个－今天／今儿个－今日／今日－今天”、“明儿－明天／明儿个－明日／明儿个－明天／明日－明天”、“昨儿－夜来／昨儿个－昨天／昨日－昨天”の如く北京語、南京語の対比が示される。“～日”は当時南北共通であったことが分かる。現在では“～天”系の語が普通話として用いられているが、江淮官話から普通話の地位を獲得した経緯について、言語資料からの調査データが待たれる。

今天 7	明天 3		后天 3	一天 2	几天 3	数天 1	那天 1	天天 1
今日 40	明日 7	昨日 1		一日 18	几日 10		那日 3	

本書には1例“今早”が用いられている。許宝華・宮田一郎（2020:647）は“今天”の意味で呉語・閩語とする。江淮官話であれば“今朝”とするはずであるが、作者の語感からは“今天早上”の意味で使用しているものと考えられるべきであろう。“夜来”の語は見えない。例えば、

(63) 我今早才从报馆里取了报纸出来，一路行走，就有许多人来要和我买。(1:1)

4 おわりに

本書《六月霜》の言語的特徴は語気助詞“呢”、程度副詞“很”の二点に見出す事が出来よう。作品の主人公は紹興を活動の舞台にし、日本留学を経て、女性の地位向上、個人の権利（生存権）を主張する社会活動に身を投ずるものの、志半ばで云われ無き弾圧に倒れてしまった。主人公は紹興という呉語地域を背景にしながらも、作品の社会性から、作者は言語モードを知識階級に設定し、南北の境界線が交わる江淮官話を軸に据えながら、部分的ではあるものの北京官話の要素を意識的に用いていることが個別の現象から窺える。次の課題として、作者の言語観に加え、主人公である秋瑾がどのような官話を、あるいは呉方言を使うのか、実際の場面に応じた個々の発話を集中的に分析する必要があるであろう。作品をトータルに捉えるのと同時に、個別の背景を持つ登場人物の言語を、作者の言語観を基に客観的に分析することで、言語資料的側面から作品を評価し、言語データの蓄積に貢献することになる。

いつの時代、どの地域においても言語接触という現象は起こっており、純粋な方言、官話が存在することは想像しにくい。言語資料の核となる部分と、ゆらぐ周縁部分を

精確に観察しながら、言語的特徴を析出する必要があるであろう。本書はこのような意味において、南北の言語が交差し融合するという言語的特徴を有することが指摘されるのである。

引用書目

《官場雜新記》、中華書局上海編輯所編輯、1959年、中華書局。

《鄰女語》、憂患余生著、1957年、上海文化出版社。

《六月霜》、静观子著、1958年、上海文化出版社。

《六月霜》、静观子著、1959年、中華書局。

参考文献

阿英著、飯塚朗・中野美代子訳 1979『晚清小説史』、平凡社東洋文庫 349。

大島吉郎 1996「《官話類編》方言詞索引」、近代漢語研究会『近代漢語研究資料・索引四種—『大唐三蔵取経詩話』『宣和遺事』『紅樓夢（第一回）』『官話類編—』所収（pp.1-52）。

———2020「《鄰女語》における言語的特徴について—太田辰夫北京語七大特点説及び“～子、～兒”を中心に」、大東文化大学大学院『外国語学研究』第22号（pp.1-7）。

———2023「《官場雜新記》における言語的特徴について」、大東文化大学語学教育研究所『語学教育研究論叢』第40号（pp.1-7）。

太田辰夫 1964「北京語の文法特点」、『久重福三郎先生坂本一郎先生還暦記念中國研究』（『中国語文論集 語学雜劇篇』汲古書院 1995、pp.243-265）所収。

———1969「近代漢語」、光生館『中国語学新辞典』所収（pp.186-187）。

———2013『中国語歴史文法』、朋友書店（1958年江南書院）新装再版。

尾崎實 2007「《官話類編》所収方言詞対照表」、好文出版 2007『尾崎實中国語学論集』所収（pp.351-388）。

香坂順一 1962a「清末小説目略」、清末文学言語研究会『清末文学言語研究会会報』第1号（p.33-38）。

———1962b「下江官話の性格（一）——語彙の面から見た」、清末文学言語研究会『清末文学言語研究会会報』第2号（pp.60-80）。

———1963「清末の単音動詞——その認定の試み」、清末文学言語研究会『清末文学言語研究会会報』第3号（pp.47-89）。

———1965「清末文学」、光生館『中国語と中国文化』所収（pp.45-46）

———1983『白話語彙の研究』、光生館。

塩山正純 2022「書院生が『華語萃編』初集で学んだ「北京官話」につて」、中国近世語学会秋季研究集会レジュメ。

樽本照雄 1992「新聞に見る徐錫麟事件、秋瑾事件」、法律文化社『清末小説論集』所収（pp.277-282）。

千野万里子 2017「南京方言に見られる否定副詞“没得”」、晃洋書房『現代中国語に見られる近世中国語の影響—『紅樓夢』と『儒林外史』を資料として—』所収（pp.160-195）。

陳舒媛 2021「《老殘遊記》初集と二集における接尾辞について—“～子”、“～兒”を中心に—」、大

東文化大学外国語学会『外国語学会誌』第50号（pp.17-23）。

山田忠司 2011「關於《老殘遊記》語言特徵的報告」、遠藤光暁・朴在淵・竹越美奈子編《清代民国漢語研究》、韓國學古房所収（pp.169-175）。

阿英 1980《晚清小說史》、人民文學出版社。

林薇 1993《六月霜》、中國大百科全書出版社《中國古代小說百科全書》所収（pp.315）。

劉丹青 1995《南京方言詞典》、江蘇教育出版社。

劉順 2013 論南京方言的 VVR 動補結構形式、世界圖書出版廣東有限公司《國際漢語教育背景下的漢語研究與教學》（pp.108-116）。

劉順・潘文 2008 南京方言的 VVR 動補結構、《方言》第 1 期（pp.47-51）。

呂叔湘主編 1999《現代漢語八百詞（增訂本）》、商務印書館。

汪國勝・付欣晴 2013 漢語方言的“動詞重疊式+補語”結構、《漢語學報》第 4 期（pp.28-34）。

王引萍 2018 晚清社會性別認同的新與舊—以靜觀子小說《六月霜》為例、《北方民族大學學報（哲學社會科學版）》第 6 期（pp.148-152）。

許寶華・宮田一郎主編 2020《漢語方言大辭典（修訂本·全六卷）》、中華書店。